

二〇二一年度国文学研究資料館共同研究

【特定研究（課題）】 研究成果報告書（二〇二三年三月）

# 国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクションの基礎的研究

（代表）

綿拔 豊昭

浅井 美峰

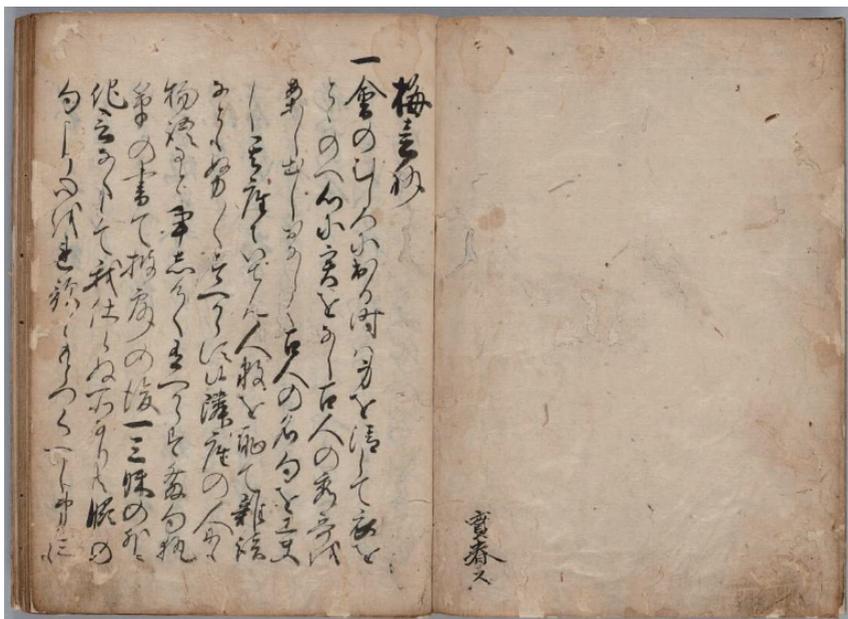
川上 一

川崎 美穂

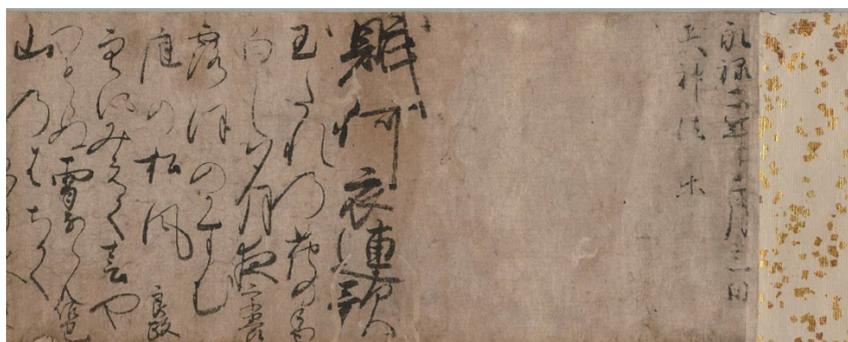
時田 紗緒里

神作 研一

編



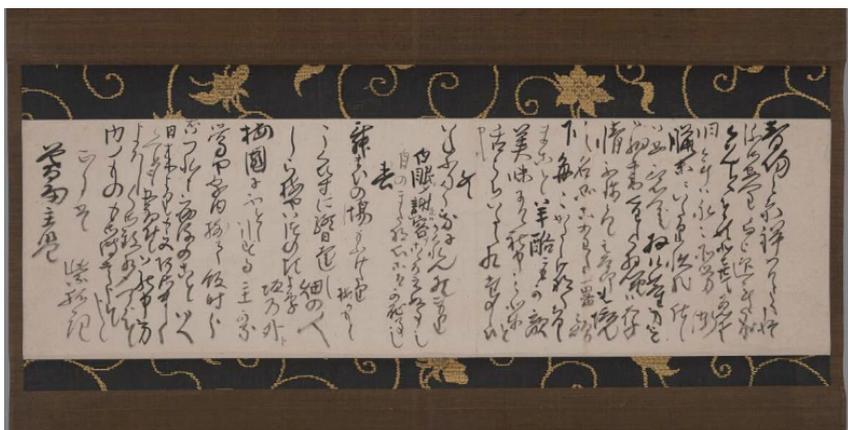
14 梅春抄（巻頭）



41 賦何衣連歌（巻頭）



42 〔天正九年五月六日賦花何連歌〕（巻頭）



48 〔暁台宛て蕪村書状〕

## 【研究概要】

本共同研究「国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクシヨンの基礎的研究」では、国文学研究資料館に所蔵される「連歌資料コレクシヨ」（木藤才蔵旧蔵）（全53点）の解題作成（分担執筆）を主要な取り組みとし、当該資料の学術的な利活用に向けた基盤整備を行った。

折しも猛威をふるっていた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染対策を講じつつ、数回にわたって資料縦覧の機会を設け、綿拔豊昭代表を中心として、全員で、書誌学に関する学的基盤を共有しながら当該連歌書の特質を把握することを心掛けた。

共同研究を推進する過程で、福田安典日本女子大学教授には、日本女子大学文学部日本文学研究室が所蔵する木藤コレクシヨ（刊本を中心とする全41点。二〇〇七年六月寄贈）の縦覧のみならず、本共同研究を推進する上で折々に温かな御指導と御助言を賜った。連歌俳諧史研究の専門家である深沢眞二元和光大学教授が特別参加して下さり、本共同研究を強力にサポートして下さったこと、初回のオンライン研究会時に長谷川千尋京都大学教授がゲストスピーカーを務めて下さったこともここに特記して、心より感謝と御礼を申し上げます。

## 【研究期間】

\*二〇二二年度の一年限り

## 【研究組織】

\*所属は当時のもの。大学院生はみな博士後期課程在学。  
（研究代表者）綿拔豊昭（筑波大学教授）

浅井美峰（お茶の水女子大学大学院生）

川上一（慶應義塾大学大学院生）

川崎美穂（慶應義塾大学大学院生）

時田紗緒里（苫小牧工業高等専門学校講師）

神作研一（国文学研究資料館教授）

## 【研究成果】 \*年次順

○綿拔豊昭「小松天満宮所蔵『新式今案歌』について」『国文学研究資料館紀要（文学研究篇）』四八号、二〇二二年三月）

○綿拔豊昭「国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクシヨンの基礎的研究について」『国文研ニュース』六一号、二〇二二年六月）

○浅井美峰・川上一・川崎美穂・神作研一・時田紗緒里・深沢眞二・綿拔豊昭「木藤才蔵先生旧蔵連歌資料コレクシヨンの紹介」（俳文学会東京例会研究発表、於江東区芭蕉記念館、二〇二二年六月二五日）

○浅井美峰・川上一・川崎美穂・神作研一・時田紗緒里・深沢眞二・綿拔豊昭「報告・国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクシヨ」『連歌俳諧研究』一四三号、俳文学会、二

〇二二年九月)

○綿拔豊昭「二歌新式」について」(『国文学研究資料館紀要

(文学研究篇)』四九号、二〇二三年三月)

○川崎美穂「中世末期武家の五山文化継承―国宝上杉家文書

『文鑑』の成立をめぐる―」(『国文学研究資料館紀要

(文学研究篇)』四九号、二〇二三年三月)

(文責) 神作 研一

## 凡 例

- 一、本報告書に掲載した、浅井美峰・川上一・川崎美穂・神作研一・時田紗緒里・深沢眞二・綿拔豊昭編「国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクション解題(付)書名索引」は、『連歌俳諧研究』一四三号(二〇二二年九月)に掲載された「報告・国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクション」をベースとして、紙幅の制約によって割愛せざるを得なかった書誌および伝本情報、参考文献などを適宜増補し、さらに一部の資料には積文を添えた(決定版)である(冒頭に置いた「緒言」も増補した)。また、検索の便に配慮して、新たに末尾に「書名索引」を添えた。なお、原本のデジタル画像は、すべて国文学研究資料館の「国書データベース」に記載されているので、かれこれ御参照を賜りたい。
- 一、所収書目には、孤本にして未翻刻の資料がいくつか含まれており、それらの中から二点―41賦何衣連歌と42〔天正九年五月六日賦花何連歌〕―を選んで、その翻印を併載した。
- 一、「解題」中の積文ならびに資料翻字の方針は以下の通り。
  - ・仮名遣いは原本のままとしたが漢字は通行の字体に改めた。
  - ・句読点や濁点は付さなかった。
  - ・判読不能箇所は□で示した。
  - ・百韻は、句頭に通し番号を付し、一句を一行で掲出し、紙移りは『で示した。

目次

研究概要・研究期間・研究組織・研究成果	1
凡例	2
目次	3
国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクション解題	
(付) 書名索引	
浅井 美峰	
川上 一	
川崎 美穂	
神作 研一 編	
時田 紗緒里	
深沢 眞二	
綿拔 豊昭	4
川上 一	29
『賦何衣連歌』翻印	
川崎 美穂	32
『(天正九年五月六日賦花何連歌)』翻印	

国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクション解題  
(付) 書名索引

緒言

本稿は、国文学研究資料館(以下「国文研」と略記)に所蔵される木藤才蔵【きどう・さいぞう/日本女子大学名誉教授/一九一五・二〇一四】旧蔵資料の解題である。全五三点。

二〇〇七年五月二五日に、木藤氏御本人と国文研の伊井春樹館長(当時)との間で「覚書」が締結され、そこには、この五三点の「寄託」とともに「木藤才蔵氏死去後は、学術研究の推進のため、国文学研究資料館が寄託資料を一括して受贈します」との文言が明記されていた。この「覚書」に基づいて、木藤才蔵氏御逝去後の二〇一六年九月二六日に御遺族木藤邦造氏より「寄贈」されたものである。<sup>1)</sup> 国文研では現在、「連歌資料

浅井 美峰  
川上 一  
川崎 美穂  
神作 研一 編  
時田 紗緒里  
深沢 眞一  
綿坂 豊昭

コレクション(木藤才蔵旧蔵)の名称で保存公開しているが(文庫番号は「19」)、連歌書以外の分野の書物や書簡などが含まれていることに鑑み、本稿では「木藤才蔵コレクション」の名のもとに括った。

さて木藤氏は、中世文学、特に連歌史研究に瞠目すべき業績を遺しており、<sup>2)</sup> その達成は今もわたくしたちに計り知れない学恩を齎している。本コレクションは、その(木藤連歌学)を支えたいわば屋台骨であり、貴重な連歌書を多く含んでいる。量は五三点と少ないが、その質は古写本の蔵儲に富んだ珠玉のコレクションと見るべきものだ。10〜13老のすさみや21〜23連歌天水抄、25〜30連歌新式のように、同じ書物が何点も見出されるのはいかにも研究者らしい蒐書であるし、36因幡千句、38賦

山何連歌、41賦何衣連歌、42天正九年五月六日賦花何連歌など  
員数連歌の孤本や、8師友のように私撰集の孤本が含まれてい  
るのも注目される。連歌書以外にも、48晝台宛て蕪村書状や49  
池大雅自画讀俗語短冊などの優品があり、古活字版の1撰集抄  
も見出される。

名家の旧蔵も以下の通り。まず17連歌拓善集は、伊勢桑名の  
実業家竹内篁園（一八七六・一九四七）旧蔵の連歌論書。2水  
鏡と25連歌新式の両書は、同じく実業家の岡田真（一九〇二・  
八四）の旧蔵にかかる。20連哥指南車は、俳文学者で京都府立  
大学教授を務めた浅田善二郎（一九〇四・八一）旧蔵。かの弘  
文荘から購入した書も五点に及ぶ。すなわち、飛鳥井雅親自筆  
の6蹴鞠条々、伝肖柏筆の8師友、14梅春抄、15連歌初学抄、  
そして26連歌新式である。

いま、このコレクションの全体像を見渡すために、本「解  
題」の分類に基づいて、分類網目ごとの書目点数を掲げてみよ  
う。

- I 文学
- 1 国文 (1) 小説 ①説話物語 (1点) ②歴史物語 (1点)
  - 2 漢文 (1) 別集 (1点)
  - 3 和歌 (1) 歌論・作法 (3点) (2) 撰集 ①勅撰集 (1点) ②私撰集 (1点)
  - 4 連歌 (1) 総記 (1点)

- (2) 連歌論書 (15点)
- (3) 式目・作法 (11点)
- (4) 員数連歌 ①千句 (2点) ②百韻 (5点) ③合集 (1点)

- II 歴史 1史料 (1点)
- 5 俳諧 (1点)
  - 6 歌謡 (1点)
  - (5) 家集 (2点)
  - (6) 書簡 (2点)
  - (1) 書簡 (1点)
- III 政治・法制 附故実 1官職 (1) 公家 (2点) (2) 武家 (1点)

連歌史研究者として、氏が丹精込めて蒐集してきたその〈歩  
み〉にも思いを致したい。

なおこれら五三点は「特別コレクション」に指定されている  
ため、原本の閲覧には事前予約が必要だが、既に全点のデジタ  
ル画像が公開されているので、適宜利用されたい。<sup>④</sup>

注

- (1) 神作研「閲覧室だより」『国文研ニューズ』四八号、  
二〇一七・七。
- (2) 「木藤才藏教授著述目録」『国文目白』二二二号、\*木藤  
才藏教授退任記念号、一九八三・三）参照。

(3) これまで古典籍のデジタル画像を収載してきた国文研の

「新日本古典籍総合データベース」は、『国書総目録』を継承して伝本情報を増補収載してきた。「日本古典籍総合目録データベース」と統合され、本年二〇二三年三月一日より「国書データベース」の名のもとに運用を開始している。

(4) 因みに、氏の蔵書は、国文研への寄託とほぼ同時期の二〇〇七年六月に日本女子大学文学部日本文学研究室にも寄贈された。そちらは刊本中心で、全四一点。通俗連歌刊本の消長とその意味を考える上で甚だ興味深い資料群だ。氏の蔵書の全貌は、双方を縦覧して初めて捕捉し得ることを明記しておく。白石美鈴「木藤才蔵先生御寄贈書籍紹介」『国文目白』四七号、二〇〇八・二二 参照。

### 【付記】

泉下の木藤才蔵先生と御寄贈賜った木藤邦造氏をはじめとする御親族の皆さまに、改めて衷心より感謝と御礼を申し上げる。コロナ禍での文献調査に際して、国文研学術情報課の和田洋一課長補佐ほか司書の皆さまの御高配を忝なくしたことも添記する。

(神作 研一)

### 解題凡例

一、本稿は、国文研所蔵木藤才蔵コレクションの資料解題である(全五三点)。その記述は、簡潔を旨として、以下の方針で行った。

#### (分類)

一、コレクションの性格と概要を把握できるように、分類した。

分類網目は『改訂内閣文庫国書分類目録』(国立公文書館内閣文庫、一九七四・七六)に依拠し、なお『綿屋文庫連歌俳諧書目録 第一・第二』(天理図書館編刊、一九五四・一九八六)と『日本古典籍分類表(試案)』(国文研分類研究会編、二〇〇八)を参照して定めた。

#### (排列)

一、分類網目内の排列は、おおむね成立年代順に拠った。

#### (記載事項)

一、見出し項目として、通し番号・書名・書名の訓み・請求番号を立てた(木藤コレクションの文庫番号は「19」)。

一、書名は原則として本文巻頭内題に拠る。やむを得ず外題等に拠った場合は、その旨を記した。

一、書名と異なる統一書名や国文研整理書名、別名があるものについては、それらを掲出した。

一、解題には、概要、編著者名、書型、冊数、書写年次/刊行年次、装訂、表紙、表紙サイズ、外題、内題、丁数、一面行

数、奥書・識語／刊記、書入れ、蔵書印、伝本、参考文献等を適宜記載した。

一、装訂は袋綴の場合は省略。推定事項には「      」を付し、文字は原則として通行の字体に従った。改行は「      」で、虫損等による判読不能箇所は□で、漢数字は「イチゼロ方式」で示した。

一、本文や奥書等の引用に際しては、濁点は付さず、原本のままとした。

(執筆と編集)

一、本解題は分担執筆であり、各項の末尾（      ）内に執筆者名を示したが、成稿にあたっては、神作・深沢の両名が形式面の整序を中心に適宜加除修訂を施した。

## 解題

### I 文学

#### 1 国文

##### (1) 小説

#### ① 説話物語

##### 1 撰集抄 (せんじゅうしょう) 【19・53】

編者未詳、西行仮託の説話集。古活字版。大本九卷合一冊。

〔元和寛永頃〕刊(無刊記)。縦二八、〇×横一七、八糎。雷文空押縹色表紙改装。外題(左肩沢瀉松文様題簽)「撰集抄」。

内題「撰集抄卷第一 西行記」。一〇七丁。一面一二行。無辺無界漢字平仮名交じり。本文の濁点も活字。朱・墨書入れ。印記「長谷文庫」。本書は略本系で、説話数は五人。説話題はなく、説話の区切りの改行のみ。川瀬一馬『増補古活字版之研究』の分類に拠ると、本書は無刊記古活字版の寛永中刊第三種本。

#### 【参考文献】

撰集抄研究会『撰集抄全注釈』上・下(笠間書院、二〇〇三)

西尾光一『撰集抄』(岩波文庫、一九七〇)

川瀬一馬『増補古活字版之研究』上・中・下(ABA J、一九六七) (浅井美峰)

#### ② 歴史物語

##### 2 水鏡 (みづかがみ) 【19・48】

藤原(中山)忠親作か。大本三卷合一冊。(江戸中期)写。

卍繋ぎ飛雲艶出丹表紙。縦二七、〇×横一九、八糎。外題(左肩題簽)「水鏡 全」。内題「水鏡」。帙題「水鏡 元禄頃写合本一冊」、背表紙「水鏡 元禄頃写」。本文墨付一二丁。一面一行。奥書なし。印記「賢木/屋印」、「岡田真/之藏書」(岡田真)、「紀伊海/部関戸/谷田部」。本書は古本系の流布本系統。(時田紗緒里)

#### 2 漢文

##### (1) 別集

##### 3 「良寛和尚墨跡」(りょうかんおししょうぼくせき) 【19・16】

掛軸一幅。(江戸後期)写。本紙縦二二一、七×横二七、一糎。良寛壮年期の五合庵在任時に詠んだ漢詩(七絶)を大書したものの(転句の三字めまで存)。出典は「解良家横卷」。良寛筆の真偽の識別は非常に難しいが、存疑と判断する。良寛詩の校注書は多種が備わり、例えば、谷川敏朗著『校注 良寛全詩集』(春秋社、新装版二〇〇七)では二〇八番詩(二二七頁)。内山知也ほか編『定本良寛全集』第一巻詩集(中央公論新社、二〇〇六)では五六〇番詩(三九八頁)にあたる。

#### (釈文)

頭髮蓬々耳卓胡納衣／半破若雲烟日暮城／釈良寛書

## 3 和歌

## (1) 歌論・作法

## 4 愚秘抄(ぐひしょう)【19・44】

伝藤原定家著。大本仮綴一冊。(江戸初期)写。共紙表紙。

縦二三、〇×横一五、六糎。楮紙、墨付七五丁。一面一〇行。

虫損甚し。外題なし。内題①「愚秘抄 鶴本」(二才)、②「愚秘抄 鶴末」(四〇才)。本奥書「五月やみ大井川にくたす舟のもとす／ゑは京極の黄門侍郎のかきをける／とて或人うつして函の中に秘し侍る／を念比に借とりてうつし侍ぬる此書／の事流たしく伝れる所にて尋侍／しかはさるもの侍らすこの二の鳥は納物／の名にてそ侍るかゝる事はいかにも為実／卿謀書の中などにやとそ侍し猶／秘蔵の故にや又まことにもこそしか／あれともさらにをのつからをもむき』たかはぬ事も侍れば更にすてはてんもと／覚て応安第二の年神無月上の絃の比／うつしをはりぬる」(七五才・ウ)。定家仮託書。鶺鴒系偽書の一つ。「鶴本末」とも称される。三輪正胤の系統分類に拠れば、本書は第四類(群書類従系)に属する。本書は定家以下の奥書がなく、応安二年の仮名奥書を備えるもの。同様の奥書を有する伝本に、肥前島原松平文庫蔵本(一一七・五三)、国文学研究資料館久松潜一旧蔵本(一一・六一)などがある。

## 【参考文献】

三輪正胤執筆「愚秘抄」『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八六)

島津忠夫『和歌文学史の研究—中世編—』(角川書店、一九七)

館野文昭『愚秘抄』諸本研究の諸問題—現状と課題をめぐって—『国文学研究資料館紀要(文学研究篇)』四六号、二〇二〇・三(川上 一)

5 「三五記・愚秘抄・桐火桶」(さんごき・ぐひしょう・きりひおけ)。【19・43】

伝藤原定家著。大本一冊。(江戸前期)写。若草色表紙改装(大部分剥落)。縦二八、六×横二〇、九糎。楮紙。墨付七三丁。一面不定(九く二〇行)。外題「鶴本末／「鶺鴒」「」」(左肩打付書き)。内題①なし(三五記上巻)、②「鶴末 三五記」(同下巻、二五才)、③「愚秘抄(鶺鴒／鶴本)」(愚秘抄上巻、三七才)、④「鶺鴒末」(同下巻、五六才)、⑤「鶺鴒本末奥書」(六二才)、⑥「玄旨抄」(桐火桶、六四ウ)。後筆書入れあり。藤原定家仮託のいわゆる「鶺鴒系偽書」のうち三書の合写本。『三五記』は二巻本。①上巻は「夫人に賢愚あり賢は稀に愚なるはあまねし」と始まり、「此条々皆人あまねこくさなからさすかに(中略)堅くまほりて外見をつゝしむへし」で終わったのち、建保五年定家奥書、宝治元年為家奥書、文永六年為氏奥書、永仁三年為実奥書、正和二年通春奥書、元応二年通賢奥書、貞治二年其阿奥書をもつもの。②下巻は「経信卿の云

和歌は混の源として菩提をすゝむる要路也云々」と始まり、  
「此等はさせる事なき様なれとも唯伝一子秘事なるへし（中略）堅守て不可及外見者也 千金莫伝」で終わり、建保五年定家奥書、宝治元年為家奥書をもつもの。『愚秘抄』は二巻本。三輪正胤が分類するところの第三類の構成を持つ。③上巻は「夫和歌は人の心を種としてと貫之も書とゝめて侍り」から始まり、「かたはし計鷲の末に申留侍へし誰かしらんもいさゝかかはる道侍らしなればとてなり」で終わり、定家奥書、宝治元年為家奥書、弘長元年為家相伝奥書、正応三年為氏相伝奥書、正和三年為実相伝奥書を備える。④下巻は「夫当道を重すへき事をそ返々先人申をかれし」と始まり、「住吉明神の御告に依て日來の用心を書連畢」で終わるもの。上巻同様定家為実奥書があるのに加えて、正仲元年行弘奥書、文和二年四辻宮奥書、永和三年勘解由小路奥書が備わる。これらの後に⑥「鶉鷲本末奥書」と題して、撰集故実や歌会作法等が記されている（奥書はなし）。⑦『桐火桶』は「玄旨抄」という内題をもつ。冒頭「これはさせるふしも侍らねとも先人の申をかれし事をかたはしつゝからの様に書とゝめ侍へし」から始まり、末尾「ゆめにももらし見することあるへからすおそろし〜」で終わり、建保五年定家奥書、弘長二年為氏相伝奥書を備える。島津忠夫の分類によれば第二類本に相当する伝本。

【参考文献】

三輪正胤執筆「愚秘抄」『日本古典文学大辞典』（岩波書店、

一九八六）

島津忠夫『和歌文学史の研究—中世編—』（角川書店、一九七七）

館野文昭『愚秘抄』諸本研究の諸問題—現状と課題をめぐって—（『国文学研究資料館紀要（文学研究篇）』四六号、二〇二〇・三）（川上 一）

6 蹴鞠条々（しゅうきくじょうじょう）【19・42】

飛鳥井雅親著。卷子装一軸。延徳二年写（自筆）。桐箱入り。茶色地牡丹唐草文様緞子表紙改装。見返し金砂子散らし。本紙縦三四、一×全長五〇五、五糎。鳥の子紙、一一紙を継ぐ。外題なし。内題「蹴鞠条々」。箱書き「蹴鞠条々／飛鳥井榮雅自筆伝書／延徳二年写」〔森銑三〕筆。伝授奥書「八境図両分図対縮図并廿五ヶ条／注之者也爰左大弁宰相殿先年／自文明比於濃州可為門弟之由／頗所望異于他也連々芳志不淺／有誓状等仍今凌老眼書之所／与申也於口伝故実等次第々々／可奉授之賢息一人之外不可／教訓又外深可被禁也當時似好／鞠之輩不弁道之邪正天下零落之／姿也相併々々承不審可一々可教訓／申者也／延徳二年七月 日／沙弥荣雅（花押）」（一紙）。印記「月明莊」。飛鳥井雅親（法名荣雅）が延徳二年七月、左大弁葉室光忠に与えた蹴鞠伝書。「庭作事」以下二五ヶ条にわたって蹴鞠の作法・技法が説かれる。従来、平野神社難波家旧蔵本（六一八八・三・六九）や東北大学附属図書館狩野文庫蔵本（狩五・一七三六八）などの転写本が知られていたが、本書は

その原本。『弘文荘待買古書目』四三号（一九七二）・五〇号（一九七七）に掲載。

【参考文献】

山本啓介「中世における和歌と蹴鞠―伝授書と作法―」『中世文学』五六号、二〇一一・六

山本啓介「蹴鞠伝授書から見た室町・戦国期における飛鳥井家とその周辺」『国文学研究資料館紀要（文学研究篇）』四〇号、二〇一四・三（川上 一）

(2) 撰集

① 勅撰集

7 金葉和歌集（きんようわかしゅう）【19・50】

源俊頼奉勅撰。大本一帖。〔室町後期〕写（伝広橋国光筆）。

列帖装。桐箱入り。香色地に桐襷文様緞子表紙改装。見返し金銀泥雲霞花文様金銀砂子散らし。縦二四、三×横一六、五糎。鳥の子紙。墨付九九丁。一面一〇行、和歌一首一行書き。外題

「金葉和歌集」（左肩朱色紙貼題簽墨書、本文同筆、内題「金葉和歌集卷一（く十）」。箱書き「広橋大納言国光卿筆／金葉和歌集 一冊」。極書き（折紙）を付属し、封紙に「金葉和歌集証文」、折紙に「金葉和歌集一冊／広橋大納言国光卿真筆／無疑者也／宝永三年／初冬仲旬／古筆／了音（琴／山）墨印）／外題同筆」、裏面に「うちなひき」とある。『金葉和歌集』はその成立事情から三段階の本文が伝わるが、本書は二度本。卷

一〇の「連歌」以降を欠いており、排列も通行する二度本本文と相違する点が少なくない。本書と同じ様態をもつ写本に、宮内庁書陵部蔵桂宮本（五一〇・三六）がある。平澤五郎『金葉和歌集の研究』において「精選本系三類四」に分類される江戸前期写本で（六三六頁に掲出）、従来類本を見ない独立した伝本であった。書写年代や本文のありようからみて、本書は書陵部蔵本の親本ないしそれに類する写本と見てよい。

【参考文献】

平澤五郎『金葉和歌集の研究』（笠間書院、一九八二）

（川上 一）

② 私撰集

8 師友（しゆう）【19・7】\*書名は外題に拠る

大本一冊。〔室町中期〕写（伝肖柏筆）。苔色地に七賢図表紙改装。見返し金紙。縦二六、〇×横二一、〇糎。外題「師友」（左肩貼題簽墨書、本文同筆力）。内題なし。帙外題「師友（牡丹花肖柏自筆／原本）」〔森銑三〕筆。楮紙。本文墨付二八丁。一面一〇行、和歌一首二行書き。書写奥書「夢庵老牡丹花」。印記「月明荘」。正筆書き「師友一冊 名あり（印）／牡丹花肖柏正筆」を付す。和歌・漢詩句の抜書。和歌は主に『古今集』から『続後撰集』までの勅撰集歌を、漢詩は唐・宋詩の秀句をおおむね四季恋雑の順に選出する。肖柏撰の秀歌撰『九代抄』との関連が想定されるものの、他に類本を聞かない孤

本。奥書に「夢庵老牡丹花」とあり、肖柏筆とすれば、牡丹花改名後の永正八年冬以降の写し。帙題簽では「自筆原本」とするが、本書が肖柏編であるかどうかは不明。（川上 一）

#### 4 連歌

##### (1) 総記

9〔竹苑抄・連歌百韻・宗長句集〕（ちくえんしょう・れんがひやくいん・そうちようくしゅう）【19・51】

本書は、①「竹苑抄」、②専順と宗祇の連歌百韻、③法永と宗長の連歌百韻、④宗長の発句付句から成る。①は、藤原為家の説をその息為顕が纏めたと伝わる鎌倉時代の歌学書。②は、寛正五年正月一日興行の「名所連歌」百韻で、専順は「花の春たてる所やよしの山」の発句一句を、宗祇は「白雲いつこかさむかつらき」以下九九句を詠む（内三三句に合点を付す）。現存諸本は大東急記念文庫蔵本、天理大学附属天理図書館蔵本はじめ一四本〔連歌総目録〕明治書院、一九九七）。影印が『大東急記念文庫善本叢刊 中古・中世篇』（汲古書院、二〇〇九）に収録される。③は、永正一三年一〇月一二日に催された連歌百韻で、法永は「折かさせ老の名残の春の花」の発句を、宗長は「さくらも馴し年やしたはん」の脇句以下九八句を詠むか。なお、岩下紀之『那智竈』に関する覚え書〔連歌俳諧研究〕五一号、一九七六・七）によると、孤本であるが、法永なる人物の存在が確認できず、また興行日と発句の季節が一致

しない点に不審が残るとされる。④は、発句と付句一三九句が収載され、内一二七句が宗長の第二句集『那智竈』と一致する。なお、当該書は『神宮文庫蔵 堀河院百首・諸願文集・竹苑抄』（汲古書院、一九七三）所載の影印と一致し、かつて神宮文庫所蔵であった一書の可能性が高く、何らかの事由で市場に出品されて木藤氏の許に収まったと推測される。神宮文庫蔵本には、現在は剥離した表紙があり「連歌師月樵筆」の題簽が貼付され、当該書の編著に連歌師が関与したことを窺わせる。中本合一帖。〔江戸初期〕写。列帖装。縦一九、五×横一四、〇糎。香色表紙改装。外題は中央に「竹苑抄」と直書。内題「竹苑抄」。本文墨付六五丁。一面八行。奥書・識語ともなし。（川崎美穂）

##### (2) 連歌論書

10 老のすさみ・発句判詞（おいのすさみ・ほつくはんじ）

##### 【19・3】

宗祇著。卷子本一軸。〔室町末期〕写。本紙縦一三、〇×全長約一八五〇糎。緑地三階菱に獅子鳳凰編目文繋ぎ緞子表紙改装。見返しは金地。外題なし。内題「老のすさみ」。同筆による書入れあり。裏面は金銀箔散らし。巻末に花押二種あり。箱書きに「下冷泉殿持為之筆／老のすさみ」とあるが、不審。『老のすさみ』は七一紙目までで、途中に脱落や錯簡あり。奥書・識語なし。木藤才蔵『連歌論集 二』三一頁の6に「某家

蔵卷子本」として本書を立項。『発句判詞』は七三紙目から九二紙目まで。内題なし。四季の区分も不記。最終句の判の後半と跋文、奥書・識語なし。木藤才蔵『連歌論集 二』四三頁の3に「某家蔵室町期古写本」として本書を立項し、「岩瀬本系の諸本の中では最も古い写本であるが、それらの本の祖本ではない」と記す。

【参考文献】

木藤才蔵『連歌論集 二』(三弥井書店、一九八二)

ノットジェフリー『老のすさみ』(国文研創立五〇周年記念展示図録『こくぶんけん(推し)の一冊』所収、二〇二二)

11 「老のすさみ」(おいのすさみ)【19・29】

(浅井美峰)

宗祇著。中本一冊。〔江戸中期〕写。縦二三、八×横一九、七糎。縹色雷文繋ぎ桐唐草文様表紙。外題(左肩題簽)「破損」秘伝鈔 全。内題なし。本文墨付五三丁。一面八行。奥書「文明第十一(己亥)春三月」。印記「東岡/蔵書」。

12 老のすさみ(おいのすさみ)【19・30】\*書名は序中題に拠る

(綿拔豊昭)

宗祇著。大本一冊。〔江戸中期〕写。縦二八、〇×横二〇、〇糎。鳥の子色地疋繋ぎ花文様表紙。外題(左肩題簽)「童蒙抄」。本文墨付三三三丁。一面一二行。奥書・識語ともになし。印記「小林山/蔵書」。虫損。(綿拔豊昭)

13 老のすさみ(おいのすさみ)【19・31】\*書名は原表紙の外題に拠る

宗祇著。大本一冊。〔江戸後期〕写。縦二四、〇×横一七、

五糎。縹色後補覆表紙。原共紙表紙の左肩に「老のすさみ全」と墨書。本文墨付四七丁。一面九行。奥書「于時文明第十一(己亥)春三月」。少虫損。(綿拔豊昭)

14 梅春抄(ばいしゅんしょう)【19・11】

兼載が北野社松梅院の梅寿丸に与えた書。別名「梅薫抄」。

「式目哥」四八首と「新式拔書」を付す。半紙本合一冊。〔江戸前期〕写。縦二二、八×横一七、〇糎。薄茶色打曇表紙。左肩題簽あるも外題なし。内題「梅春抄」。本文墨付三五丁。一面一〇行。奥書なし。識語「御けひこのため一書の事承候/先々見え来候分、大かたしるし参らせ候/尽期なき事に候/重而御申候へく候/松もしさまへ春」。式目哥の直前に「あなかしこく/梅寿さま まゐる」。扉裏左下に「実春之。虫損あり。『連歌論集 四』(三弥井書店、一九九〇)の底本。『弘文荘敬愛書図録 I』(一九八二)所載「40 連歌梅春抄異本猪苗代兼載著 大永天文頃古写本」と同一本。(川崎美穂)

15 連歌初学抄(れんががしよがくしょう)【19・37】\*書名は外題に拠る

連歌初学者向けに記された「宗祇初学抄」を、里村紹巴がある大名の所望により書写した書。横本一冊。〔江戸前期〕写。縦一五、六×横二一、五糎。共紙表紙。外題は左肩に「連歌初

学抄」と直書。内題なし。本文墨付三二丁。一面一三行前後。

奥書「宗祇在判」。識語「此初学抄は宗祇作也御屋形様／連哥御執心之条紹与と申／同宿に書写之事申付進上候今／一冊墨田川とててうほう候大概／作意心もち彼両抄に過へからず候／貴国に無之候ハ、頓而可承候進上／可仕候世上に候へ共至宝と知と不／知との事秘事候愚拙者廿八歳／より無師匠候つる尽以此抄物工／夫申候キ近日百韵以下備賢覽／候可然様御取成所仰候恐惶頓首／<sup>江</sup>紹巴」。伝本一〇本中、天理大学附属天理図書館蔵本が、本書と同じ識語を有する。少虫損。『弘文荘待賣古書目』二四号（一九五四）所載の「148 連歌初学抄」と同一本と推定される。

16 「連歌初心抄」（れんがしよしんしょう）【19・10】\*書名は帙題に拠る

著者は宗碩か。連歌初学者に向けて連歌の作句方法および連歌会の作法を説いたもの。宗祇・兼載・基左・宗長の言説を引く。大永八年（二五二八）以前の成立。横本一帖。「室町後期」写。列帖装。茶色地緞子表紙。見返しは鳥の子紙で銀の切箔散らし。縦一三、〇×横一九、五糎。外題・内題ともになし。本文墨付三三丁。一面一四行。奥書「右此一帖正月七日に初て／同十一日に書終ぬ俄なれば／猶誤も多かるへし又たし／なみなからん人に是非を／みえ侍らん無詮若いた／つらに外見あらは／住吉玉津嶋の御めくみ／にも叶へからず誠粗々／私に聞覚のため也忍のみそ／大永八年正月十一日」。帙題「連歌初

心抄／月村斎宗碩著／足利末期古写本」。著者について、木藤は「宗碩だけでなく、寿慶その他の老巧な連歌師の中から慎重に求むべきではないかと思う」と述べる（『連歌論集 四』）。伝本は二系統あり、序文の有無によって分かれたるが、本文にも大きな異同がある。本書は序文を有する系統。

【参考文献】

木藤才蔵『連歌論集 四』（三弥井書店、一九九〇）

（時田紗緒里）

17 「連歌扱善集」（れんがたくぜんしゅう）【19・9】

宗牧編。四季それぞれの発句の詠み方について説明し、その後題ごとに七賢・宗祇等の発句を挙げる。題は堀河百首題。半紙本一冊。「江戸前期」写。縦二二、三×横一六、〇糎。黒色無地表紙改装。外題（左肩題簽）「風雅集 全」。内題なし。本文墨付六一丁。一面八行。奥書・識語なし。印記「篁園文庫」（竹内篁園）、「翠筠書屋」。

18 連歌秘袖書（れんがひしゅうしょ）【19・36】

宗牧の秘伝を宗養が三好長慶に伝授したと目される書。宗祇作「聞書」と「連歌本式目」を付す。大本合一冊。「江戸前期」写（可致）。縦二四、二×横一七、六糎。縹色糸繫ぎ艶出表紙改装。外題（後補書き題簽）「連哥秘袖書」。内題「連歌秘袖書」。本文墨付三二丁。一面一〇行前後。奥書「天文式拾四年二月三日 宗牧判／宗養判／長慶朝臣／右之一冊御執心深ヨリ書写令進入候／努／他見有間敷候仍而如件」（二二〇ウ）、

「宗祇法師の作也／延宝三年／乙卯霜月吉日 可玖（花押）／右之一冊御執心以為／書写之進候努々他／見被成間敷候以上／善之文／西村長愛子」（三一才）、「連歌本式目」（三一ウ）に「此本応安の新式たるへし／明応之年十二月日」。帙題簽「連歌秘袖書」延宝三年可玖、写一冊、及び奥書によれば、書写者は立圃門の俳諧師可玖。三二才に朱陽壟形の印記あり。朱書入れあり。木藤才蔵『連歌史論考 下』（明治書院、一九七三年）七二四頁によれば、本書は「連歌奥儀明鏡秘集」の奥書と同一だが、その組織・内容・項目数は異なることされる。（川崎美穂）

19 連歌奥儀明鏡秘集（れんがのおうぎめいきょうひしゅう）【19・27】

宗牧から宗養、宗養から三好長慶への伝授書。『連歌秘袖抄』との関係が指摘されるが、木藤は江戸期に入つて改編された書と見ている（『連歌史論考 下 増補改訂版』七二四頁）。全六一項。序中題は「明鏡秘集」。横本一冊。（江戸後期）写。縦一一、四×一七、〇糎。縹色表紙。外題なし。本文墨付一〇三丁。一面二行。奥書「従是以後は筆記の相伝／のみにて口伝をゆるさす／自身自悟の段也夢々／此書を他見すへからず／宗牧在判／天文廿四歳中春／宗養在判／長慶朝臣」。貸本屋印「甲府／連雀町／二丁目／富留屋市右エ門」「甲州／葦崎／下町／舛屋吉左エ門」「甲州／山梨郡／千塚村／□澤」。「故実条々」「系譜」「万葉古今の秘伝」「八雲神詠聞書」等を付す。伝本は、「故実条々」の有無によつて分かれたる。西尾市岩瀬

文庫蔵本・宮城県図書館蔵本は本書と同系統。

【参考文献】

木藤才蔵『連歌史論考 下 増補改訂版』（明治書院、一九九三）。原刊一九七三。（時田紗緒里）

20 連歌指南車（れんがのしなんしゃ）【19・32】\*書名は外題に拠る。

統一書名は「連歌天水抄」。宗養・昌休仮託。大本一冊。（江戸前期）写。縦二〇、六×一七、六糎。丁子色表紙。外題は左肩に「連歌指南車」と打付書き。内題なし。本文墨付七六丁。一面一〇行。奥書「住吉大明神玉津嶋別ては天満天神此／御罰可羅蒙者也不可他言者也仍起請／文如件／永禄四年十一月八日／昌休在判／宗養在判」。木藤は、本書を「宗養関係の伝書と見なす可能性は強い」としつつも、宗養から永種あたりの伝書に後人が序と奥書、起請文を付して権威付けをしたものかと推察する。伝本多数。裏見返しに「庸營築」等の書込みあり。印記「浅田／家蔵」（浅田善二郎）。

【参考文献】

木藤才蔵『連歌史論考 下 増補改訂版』（明治書院、一九九三）。原刊一九七三。（時田紗緒里）

21 連歌天水抄（れんがてんすいししゅう）【19・34】  
宗養・昌休仮託。半紙本一冊。（江戸前期）写。縦二一、六×横一五、七糎。丁子色表紙。外題・内題ともになし。本文墨付四七丁。一面二行。奥書なし。印記「義□／之印」「沢田

／氏。

22 連歌天水抄（れんがてんすいししょう）【19・35】\*書名は帙題に拠る

国文研整理書名「天水抄」。宗養・昌休仮託。横本一冊。（江戸前期）写。縦二二、四×横一七、八糎。浅縹色表紙。外題（左肩題簽）「天水抄 全」。内題なし。本文墨付九七丁、一面二行。奥書なし。（時田紗緒里）

23 〔連歌天水抄〕（れんがてんすいししょう）【19・33】

国文研整理書名「連歌書」。宗養・昌休仮託。大本一冊。（江戸後期）写。縦二九、六×横二〇、五糎。丁子色表紙。外題（中央題簽）「連哥書 明録四年 全」。内題なし。本文墨付六四丁。一面二行。奥書末尾「永祿四年十一月八日／宗養在判／昌休在判／永祿五年二月六日 宗養在判」。印記「小林山／藏書」。宮内庁書陵部藏『連歌本意抄』との校合を藍字で傍記する。木藤による校合か。（時田紗緒里）

24 連俳秘決抄（れんばいひけつししょう）【19・38】

大本一冊。（江戸中期）写。縦二七、一×横一九、八糎。栗色表紙。外題は中央銀砂子散らし題簽「連誹秘決抄 天」。内題「連俳秘決抄」。本文墨付六八丁。一面一〇行前後。見返し左下に「五徳庵／栄蘭」。奥書なし。（川崎美穂）

### （3）式目・作法

25 連歌新式（れんがしんしき）【19・17】

卷子本一軸（冊子を改装）。「室町後期」写。縦二五、〇×横

三五、〇糎。茶色布張り菊花文様表紙。見返しは左から右下に斜めに別紙、天が金銀散らし、地は金。料紙は鳥の子。もとの冊子は一面一行で、一九面。奥書「今上宸筆／以万機之暇令一覽之訖実可謂此道之肝心初学指南者也」。表紙に「荒木田守武真蹟」とある貼り紙があり、桐箱には「連歌新式 守武筆」と貼り紙がある。印記「岡田真之藏書」（岡田真）。木藤才藏『連歌新式の研究』（三弥井書店、一九九九）「第七章」で取り上げられた「岡田真之旧藏本」にあたる。（綿拔豊昭）

26 連歌新式（れんがしんしき）【19・12】

「連歌新式追加<sup>1)</sup>新式今案等」「連歌初学抄」から成る。大本一帖。「室町後期」写。列帖装。縦二五、八×横一七、四糎。緑色九曜文金唐草緞子表紙。見返しに金箔。外題なし。内題「連歌新式追加<sup>1)</sup>新式今案等」。本文墨付二七丁。一面七行。奥書「此一冊者三沢撰州弓馬の道のひま／には三跡の筆をしのひ又八雲たつ／ほとりとて連哥に一心をそめられ／式目書写すへきの命にしたかひ奉る也／天。正しき十とせのうへ七かへりの／仲夏のあやめ草ふける窓の内にして／法橋紹巴〔花押〕書之」（二六ウ）。「三沢撰州」は出雲国の三沢撰津守為虎か（陰徳記）。木藤才藏『連歌新式の研究』（三弥井書店、一九九九）三三六頁所載の「家藏紹巴自筆本」にあたり、『反町弘文莊蒐集 三越古書目録』（弘文莊待買古書目）三九号、一九七二）所載「207 連歌新式 里村紹巴自筆／天正十七年古写 上本」

と同一本と推定される。

(川崎美穂)

27 連歌新式追加并新式今案等(れんがしんしきついかならびにしんしきこんあんとう)【19・18】

大本一帖。〔室町後期〕写。列帖装。縦二四、六×横一七、

八糎。共紙表紙。左肩に「連歌新式」と直書。料紙は鳥の子。

本文墨付三二丁。一面六行。奥書「応安已来新式云今案云追

加条々并近代用捨篇目等依多／其端末学常迷商量而今／被是勤

以一冊但猶未一決之／事可暫漏之先載之以待／後君子志同者從

之亦宜乎／文龜辛酉林鐘上澣」。見返しに「鳥飼宗慶雜書」と

貼り紙。補修。朱引、点あり。木藤才蔵『連歌新式の研究』

(三弥井書店、一九九九)三二頁で「家蔵」とされた書か。

(綿拔豊昭)

28 連歌新式追加并新式今案等(れんがしんしきついかならびにしんしきこんあんとう)【19・19】

大本一帖。〔室町後期〕写。列帖装。縦二四、〇×横一六、

七糎。共紙表紙。本文墨付二四丁。一面八行。奥書「応安以來

新式云今案云追加条々并近／代用捨篇目等依多其端末学常迷／

商量而今彼是勤以為一冊但猶未・決之／事式・暫論漏之或先載

之以待後／君子志同者徒・亦益乎／文龜辛酉林鐘上澣」。奥書

の後ろに「悪筆不嫌所而已」と朱書あり。貼り紙三枚。補修。

朱引、点あり。

(綿拔豊昭)

29 連歌新式(れんがしんしき)【19・20】

国文研整理書名は「連歌新式注解書」。半紙本一冊。〔江戸初

期〕写。縦二二、七×横一六、八糎。白地青磁色菊花刷表紙。

見返しは金散らし、金で梅の絵。料紙鳥の子。本文墨付五〇

丁。一面九行。奥書「天正拾三年極月十日／悪筆与云聞書之物

二候間文字以下不審之／事共有之与云思慮二存候得共先々草案

与／蒙仰候間書遣候努々他見有間敷候惣別／新式之秘説書頭候

間少も々々他見有之者／可口惜候以上／宗巴」。虫損甚し。木

藤才蔵『連歌新式の研究』(三弥井書店、一九九九)「第五章」

で取り上げられた「天文十七年注」にあたる。(綿拔豊昭)

30 連歌新式聞書追加并新式今案等(れんがしんしきききぎきついかならびにしんしきこんあんとう)【19・21】

国文研整理書名「連歌新式注解書」。大本一冊。慶安三年

写。縦二六、五×二〇、〇糎。縹色角切れ二重角繋ぎ花菱文表

紙改装。本文墨付二四丁。一面一行。奥書「此新式注は紹

巴抄心前抄昌琢抄並師伝の説／或古き人の秘事の聞書とて有之

物をもとめ／或老功の輩に尋問し趣等を引合て注之又／予数年

披見して諸抄にも沙汰なく見わき／がたき所をは愚意をも粗く

はへて書之是は／僻案の説もあるべき歟所詮なにはの事／の上

しあしにつけて他見にいれざらんにはしかし／幽閑斎玄固／慶

安三稔(庚寅)清和上澣」。朱点、朱線あり。虫損。木藤才蔵

『連歌新式の研究』(三弥井書店、一九九九)「第五章」で取り

上げられた「幽閑斎玄固の注」にあたる。

31 連歌の歌新式(れんがのうたしんしき)【19・23】

綿拔著。大本一冊。〔江戸初期〕写。二三三首の次に「連歌

新々式歌数百五十六首作者可尋之」とあり、一五三首を記す。

縦二八、二×横一九、八糎。浅黄色布目地表紙。外題(左肩題「籤」連歌之哥新式。内題下に「紹巴作 当時改易少々」とある。本文墨付二〇丁。一面一〇行。印記「芝川文庫圖書之印」(芝川又右衛門)。虫損。木藤才藏『連歌新式の研究』(三弥井書店、一九九九)「第六章」で取り上げられた「紹巴作『歌新式』の「家藏本」にあたる。

32 昌琢以呂波新式(しようたくいろはしんしき)【19・22】

昌琢著。横本仮綴一冊。「江戸前期」写。存卷上(「い」から「く」まで)。縦一四、八×横二一、二糎。共紙表紙。外題は左肩に「琢式上」と打付書き。本文墨付一六三丁。一面二二行。巻首二丁は発句や付合に関する書付け。奥書・識語ともになし。紹巴・玄仍・昌叱らの言説が引用されている。伝本は他に四天王寺大学図書館恩頼堂文庫蔵本のみ。

【参考文献】

木藤才藏『連歌史論考 下増補改訂版』(明治書院、一九九三)三。原刊一九七三 (時田紗緒里)

33 〔連歌寄合抄〕(れんがよりあいししょう)【19・24】

半紙本一冊。「江戸中期」写。縦二四、三×横一六、五糎。共紙表紙。外題・内題ともになし。本文墨付八六丁。一面一四〇一八行。補修、朱引点あり。巻頭は「○老・狐・松(注略)夫・老ぬれば花の都に有侘て山に塵を摘んとそ思ふ」とあり、おおむね連歌用語・寄合語・参考和歌で構成される。

34 連歌寄合抄 下(れんがよりあいししょう)【19・25】

半紙本一冊。存卷下。「江戸初期」写。縦二四、〇×横一六、七糎。焦茶色表紙。本文墨付一〇五丁。一面八行。巻末に「連歌寄合抄巻下 実盛之」とある。虫損。朱引、点あり。表紙左下に「嶋谷」、後ろ表紙右下に「島谷上総之助」と墨書。最終丁裏に「天皇」に関すること、裏表紙見返しに「鷹」に関する若干の書入れあり。未刊国文資料『連歌寄合集と研究(上・下)』(一九七九)における校合本内の「木藤架蔵本」に当たる。

35 連歌付合集(れんがつけあいしゅう)【19・26】

中本一冊。「江戸中期」写。縦二〇、二×横一三、八糎。共紙表紙。表紙左肩に「連哥付合集 私」と直書。本文墨付二〇丁。一面八行。虫損。(綿拔豊昭)

(4) 員数連歌(含、合集)

①千句

36 因幡千句(いなばせんく)【19・40】\*書名は外題に拠る

文明七年十一月、美濃国因幡にて張行。連衆は専順・宗春(兼載)・紹永ほか。半紙本一帖。「江戸前期」写。縦二二、〇×横一四、八糎。包背装。縹色表紙改装。外題(左肩後補書き題籤)「因幡千句」。内題なし。本文墨付六一丁。一面九行。奥書「此千句広幢筆跡也未孫之兼如法師同心証之畢」。本書

は、『千句連歌集 四』（古典文庫）所収「因幡千句」の底本（木藤才蔵解説）。孤本。

【参考文献】

木藤才蔵「（発見と報告）因幡千句について」（『連歌俳諧研究』四二号、一九七二・三）

『千句連歌集 四』（古典文庫、一九八二）

（浅井美峰）

37 〔紹巴昌叱兩吟千句注〕（じょうはしようしつりょうぎんせんくちゅう）【19・39】

別名「毛利千句注」。毛利輝元の命により、文禄三年五月に行われた兩吟で、注は自注。大本一冊。存卷下（第六〜第十百韻）。（江戸中期）写。縦二四、五×横一八、〇糎。茶色表紙改装。外題・内題ともになし。本文墨付七三丁。一面九行。奥書「文禄三年五月下旬／法眼紹巴判／法橋昌叱判」。

【参考文献】

金子金治郎『連歌古注釈の研究』（角川書店、一九七四）

（浅井美峰）

②百韻

38 賦山何連歌（ふすやまなにれんが）【19・1】

員数連歌（百韻）。（室町中期）写。卷子装一軸（懐紙を改装）。青鈍色菊牡丹唐草文様緞子表紙。見返し金箔。本紙縦一六、一×全長三九一、四糎。外題なし（白紙の金銀砂散地題簽あり）。賦物「賦山何連歌」。楮紙、八紙を継ぐ。虫損補修、総

裏打ち。一紙二八行、一句二行書き。句上あり。奥書・識語なし。発句は「花の色を待や／かすみの春の袖 隆恵」、脇は「また雪さむき／きさらぎの雲 専順」。連衆は、隆恵・専順・守阿・常佑・智蘊・隆崇・心恵・忍誓・祐存・圭昭・原秀・心孝・証阿・伝阿の一四名（句上順）。このうち智蘊（蜷川親当）は、文安五年五月二日没のため、それ以前の興行。本書はその原懐紙とみられる。『連歌総目録』に未載。孤本。木藤才蔵「連歌史年表」（『連歌史論考 下 増補改訂版』所収）の文安五年項に「家蔵本」として掲出。また、木藤才蔵「智蘊・心恵・専順一座山百韻」（『連歌俳諧研究』九八号、二〇〇〇・二）に紹介・翻刻。

【参考文献】

木藤才蔵『連歌史論考 下 増補改訂版』（明治書院、一九九三。原刊一九七三）

斎藤義光「連歌史専順年譜」（『大妻国文』一七号、一九八六・三）

（川上 一）

39 賦十三仏名号連歌独吟（ふすじゅうさんぶつみょうごうれんがどくぎん）【19・8】

兼載が大内政弘の追悼のため、明応四年九月晦日に詠んだ独吟百韻。各句頭の一字に、順に十三仏の名号を詠み込む。中本一冊。（室町後期）写。縦一九、三×横一三、五糎。茶色桔梗牡丹菊鳳凰唐草文緞子表紙改装。外題なし。内題は「賦（十三仏／名号）連歌 独吟」。裏打ちあり。本文墨付七丁。一面八

行。発句「長月もかひなき秋のわかれ哉」。句の上に、句頭に詠み込んだ名号「南無不動明王釈迦牟尼仏文殊師利菩薩普賢菩薩地藏菩薩弥勒菩薩藥師瑠璃光如来觀世音菩薩勢至菩薩阿弥陀仏阿闍如来大日如来南無虚空藏菩薩」を書き入れる。合点あり。末尾に「大内政弘吊中百韻／明応四年九月廿九日／三條殿御点廿五句之内長五句」とある。他に、大阪天満宮御文庫蔵の三本と静嘉堂文庫蔵本（連歌集書二九）がある。国文学研究資料館福井文庫蔵本は静嘉堂文庫蔵連歌集書二九の新写本、広島大学図書館福井文庫蔵の『古連歌百韻』は太田武夫蔵本（所在不明）の新写本。本百韻は、『群書類従』二九輯、雑部『あしたの雲』中に収載。

40 賦何人連歌（ふすなにひとれんが）【19・5】

（浅井美峰）

統一書名「永正七年七月五日肖柏性繁宗碩三吟何人百韻」。員数連歌（百韻）。肖柏・宗碩・性繁（池田正盛）の三吟百韻。〔室町後期〕写。卷子装一軸（袋綴を改装）。桐箱入り。薄墨色無地表紙。本紙縦二四、四×全長一四四、六糎。外題「当今 御点廿九句<sup>内長一</sup>」（打付書き）。賦物「賦何人」。楮紙、六紙を継ぐ。水損・虫損あり。総裏打ち。一紙一行（もと半葉九行）、一句一行書き。奥書・識語なし。箱書き「後柏原天皇御点／肖柏宗碩等百韻連歌（大永頃古写本）」〔森銃三〕筆、底面に「百韻連歌」と貼紙墨書。発句は「涼しさや今朝からころもたつた姫 肖柏」、脇は「ちらす柳にいそく秋かせ 性繁」。句上に「<sup>御点九句内長一</sup>肖柏三（＊）宗碩卅三 性繁卅三 桂一」とある。

る（＊左肩に「当今御点」と傍記）。御点は御柏原天皇。挙句（執筆）の「桂」は、他本に拠れば「周桂」。永正七年七月五日、性繁亭での興行。懐紙の転写と見られ、句の上部に折数の注記がある。合点二九点を完備し、このうち肖柏句（五一句）の長点を二重合点で表示する。伝本は、大阪天満宮御文庫蔵「古連歌千九百」（れー甲五）所収本など。木藤才蔵「連歌史年表」（『連歌史論考 下増補改訂版』所収）に「家蔵本」として掲出。

【参考文献】

木藤才蔵『連歌史論考 下増補改訂版』（明治書院、一九九三。原刊一九七三）

綿拔豊昭「牡丹花肖柏年譜稿」（『連歌俳諧研究』六六号、一九八四・一）

浅井美峰「肖柏と池田氏―連歌師と千句連歌主催者の関係について―」（『比較日本学教育研究センター研究年報』一一号、二〇一五・三）（川上 一）

41 賦何衣連歌（ふすなにころもれんが）【19・6】

統一書名「永禄二年二月三日賦何衣連歌」。員数連歌（百韻）。宗養・良政・紹巴ほかによる八吟百韻。〔室町後期〕写（伝宗養筆）。卷子装一軸（懐紙を改装）。牡丹唐草文様金欄綴子表紙。見返し金箔散らし。本紙縦一四、二×全長三一五、九糎。外題「永禄（二）年天神（法）楽」（左肩貼題簽墨書、本文別筆）。端作り「永禄二年二月三日／天神法楽」。元端裏書き

に「宗養筆」（本文別筆、外題とも別）とあり。賦物「賦何衣連歌」。楮紙、八紙を継ぐ。虫損補修、総裏打ち。一紙二八行、一句二行書き。句上あり。奥書・識語なし。発句は「玉たれの花の香／白し夕月夜 宗養」、脇は「露ほのかすむ／庭の松風 良政」。連衆は、宗養・良政・紹巴・清蒼・仍景・洞主・能哲・重晴。『連歌総目録』未載。孤本。木藤才蔵「連歌史年表 増補」（『連歌史論考 下 増補改訂版』所収）に「某家蔵本」として掲出。

【参考文献】

木藤才蔵『連歌史論考 下 増補改訂版』（明治書院、一九九三。原刊一九七三）（川上 一）

42 「天正九年五月六日賦花何連歌」（てんしょうくねんごがつむいかふすはななにれんが）【19・4】

天正九年五月六日、知多半島の常滑城主水野守隆が、紹巴門の連歌作者や公家を招請し、総勢一人で張行した百韻連歌。連衆は、紹巴・守隆・白（聖護院道澄）・昌叱・日野新中納言（輝資）・文閑・式政・正繁・既立・紹与・負滋（句上順）。発句を紹巴が「ななき根はひきもつくさぬあやめ哉」、脇を守隆が「池水ふかし五月雨の空」と詠む。発句は『紹巴発句帳』（夏・菖蒲・七二〇）所収。卷子装一軸（懷紙を改装）。「室町後期」写（紹巴筆）。芥子色青海波に波しぶきと小梅散らし緞子表紙。本紙縦一七、八×全長四三二、二種。見返しは金銀箔散らし草花。外題は左肩浅葱色題簽「連歌<sub>百韻</sub>」。端作り「天正九

年五月六日賦花何連歌」。奥書・識語なし。箱の上蓋内側に極札「連歌師紹巴 百韻連哥一卷／外題良親親王（極印）（墨方印<sub>平假名</sub>）守」を貼付。『連歌総目録』未載だが、奥田勲が「紹巴年譜稿（二）」（『宇都宮大学教育学部紀要』一八号、一九六八・一二）に掲げた「昭和三八年東京古典会展観（紹巴自筆、良親親王外題）」と同一本と推定される。孤本。（川崎美穂）

③合集

43 「連歌合集」（れんががっしゅう）【19・28】

国文研整理書名は「宗碩付句」。宗祇・宗長・肖柏・宗碩・三条西実隆らの連歌作品を合写した書。中本一冊。「江戸初期」写。縦二〇、四×横一五、四種。縹色表紙改装。外題・内題ともなし。巻首に所収書目（全一〇種）を載せる。本文墨付七三丁。一面一〇行。奥書「右一冊以方々証本令書写則／遂一校畢可秘之／永禄三年三月日 細川兵部大輔藤孝在判」「広胖軒藏書（花押）。印記「木村」。本文に錯簡あり。錯簡箇所には「▽最後から八枚目からつづく」（四三才）、「最後の頁につづく」（五六ウ）のように青鉛筆で書入れがある。細目は以下の通り。①肖柏点「宗碩付句」（付句一二二句、発句三五句）、②宗長点「宗碩付句」（宗碩回章）とも。有注。付句七八句、発句一〇句。京都大学附属図書館平松文庫蔵本「宗碩回章」とは句の出入りや句順の異同あり）、③「山家之連歌」（永正八年十一月三日宗長独吟百韻。補入記号はあるが七八番句

欠)、④「述懐之連歌」(永正八年正月二一日宗長独吟連歌)、  
⑤「山河」(天文二年三月六日三条西実隆独吟百韻、宗長一回  
追善。錯簡あり)、⑥「懐旧之連歌」(天文二年三月六日宗牧独  
吟百韻、宗長一回廻向)、⑦宗祇点「夢庵肖柏付句」(付句三一  
句。錯簡あり)、⑧「文明十一年十月日/山河」(宗祇賢重両吟  
百韻、他本では文明四年一〇月六日とする。錯簡あり)、⑨  
「山河」(永正二二年一月一日聴雪宗長等山河百韻。一丁  
分にあたる六〇番句く七九番句欠)、⑩「享祿三年三月三日/  
白何」(発句のみ虎王丸、宗長独吟百韻。端作りに「瀬名/十  
一歳」とあるのは、虎王丸が瀬名氏で一一歳だということ。他  
本では三月二日とするか)。(浅井美峰)

#### (5) 家集

44 [宗養発句集] (そうようほつくしゅう) 【19・2】  
統一書名は「宗養発句帖」。宗養の発句集。卷子本一軸。〔室  
町後期〕写。本紙縦一四、〇×全長一八六、五糎。緑地花に菱  
繋ぎ文表紙改装。見返しは金箔押で花唐草文様。外題・内題と  
もになし。八紙を継ぐ。奥書・識語ともになし。箱書き「宗養  
発句集/宗養自筆/永祿五年頃成原本」。宗養の発句拔書で、  
永祿四・五年の発句を中心に七二句所収。句の右肩に連歌会や  
詠作事情の注記あり。宗養発句帖断簡とされる国文学研究資料  
館蔵の掛軸(ヨ6・21)は、本作品の一三〇一七番句、一九〇  
三六番句と一致する(それぞれに一句ずつ出入りあり)。木藤

才蔵『連歌史論考』に本書に関する記述は見出されないが、増  
補改訂版の巻末「連歌史年表 増補」に「宗養句集」とあるの  
は本書か。(浅井美峰)

45 [宗養句集・桂林集] (そうようくしゅう・けいりんしゅう) 【19・41】  
国文研整理書名「宗養発句集/桂林集」。宗養の句集と一色  
直朝家集『桂林集』を合写。帙題「宗養発句集 天正頃古写本  
/桂林集 一色直朝集」[森銃三]筆。横本合一冊。〔江戸前  
期〕写。縦一四、五×横二〇、八糎。茶色表紙改装。外題な  
し。内題は「桂林集」のみ存。墨付五〇丁(末尾四丁は雑記)。  
奥書は桂林集のみ存(天正三年三条西実枝)。宗養句集は、天  
正二四年正月元日の発句「待えても去年とやいはむけふの春」  
から発句四六句、付句三二三句所収(宮内庁書陵部蔵「半松付  
句」と字送り等が一致する。合点・欠字に僅かな異同あり)。  
桂林集は一八六首所収。無注。(浅井美峰)

#### (6) 書簡

46 宗牧書状 (そうぼくしよじょう) 【19・14】  
掛軸一幅。〔室町後期〕写。白色に草花を散らした一文字・  
風帯(共裂)。中回しは格子柄更紗。本紙縦一五、八×横四  
〇、三糎。一面一四行。桐箱題「連歌師宗牧状」と直書。蓋裏  
に「燕安居士」と記し、朱文長方印「平安篠氏/宝燕石齋」  
(小笹喜三)を押捺する。極札表「連歌師宗牧新年之佳慶」、極印

「琴山」。極札裏「文名判」丙子七正「印」(墨槽円印「了延」)。了延は古筆家第七代。

(釈文)

(切封墨引) 新年之佳慶申納候了／旧冬書状とも被相達候間／祝著候仍里村弥二郎薪／見物ニ罷下候自然似合之／会席候へは御誘引所仰候／北院殿へも此由可令啓上候へとも／俄下向候之条大輔殿ニテ御／取分憑入存候駿河殿へは／御知人事候之間不及申候／筆一對進之候嘉祝／存計候委細此人可申候／恐々敬白／正月廿四日 宗牧(花押)／正道尊丈 玉案下 (川崎美穂)

47 紹巴書状(じょうはしよじょう) 【19・15】

掛軸一幅。「室町後期」写。浅葱色に牡丹を散らした一文字・風帯(共裂)。中回しは焦茶色に松葉を散らす。天地に方円模様。本紙縦一三、〇×横三七、一糎。一面一八行。箱題簽「里村紹巴自筆消息」。側面に「里村紹巴／消息／二月」。上蓋内側に「天保八年丙申夏六月大工市兵衛作為之／洪谷光所藏」。標木に「□□紹巴文 了庵」。

(釈文)

(切封墨引) 先度之蜜柑ハ一段／見事候扱々(猶々)御芳／情不浅候又小翰ハ／□方衆と紛候哉／一 一書此方へ可給書改／可申試かりし事候／数度申候へ共不令意候／不審候也／一 安楽房在洛候今日／月次(よひ)申候是へ／随意分天取申候と／存儀も去年(二月)廿一日／拝禪候て上洛候(付

申候つる／分今あくつかれ候／よし望出候社家(寄特候恐々謹言／二月晦 巴「花押」／木奉□御返事 (川崎美穂)

5 俳諧

(1) 書簡

48 「暁台宛て蕪村書状」(きょうたいあてあてぶそんしよじょう)

【19・49】

国文研整理書名は「句入蕪村手紙」。掛軸一幅。木製軸。上下は青地縮れ模様紙、中回しは茶色絹地、一文字は黒地に金の唐草模様の裂、風帯は白紙。全体の大きさは縦約一〇三×横五五、三糎、本紙は縦一五、七×横五三、五糎。二重箱入り。書状の書き出しは「春陽の嘉祥めてたく申取候」、日付・記名は「正月五日 紫狐庵」、宛名は「暮雨主盟」。蕪村発句六句を含む。添え紙あり。「謝蕪村ノ文暁台に贈ル」と題して本文を筆写し、文中の人名「几董」と、宛名の「暮雨主盟」について説明を記す。『蕪村全集 五書簡』(講談社、二〇〇八)に、96番「安永五年一月五日 暮雨(暁台)宛」として、『思文閣墨蹟資料目録』三九四号所載の写真による翻刻と注釈がある。なお、柿衛文庫『蕪村の手紙』展図録(二〇一九)掲載の「安永五年三月四日付樵風宛蕪村書簡」(柿衛文庫蔵。この時が「初公開」と発句二句を始め内容が共通し、筆蹟も一致している。

(釈文)

春陽之嘉祥めてたく申取候

弥御安全ニ而御迎年被成

候はんと奉恭喜候愚老

旧年ハ永々所勞漸

臘末ニいたり快然仕候

御安意可被下候扱几董方迄

御細書くわしく拝覽御厚

情不淺奉存候其節貴境

之名品このわた一器被贈

下毎々かたしけなく奉存候

まこと羊酪ニも可敵

美味にて社中之輩と

舌うちいたし相たのしひ

申候

冬

いねふりて我にかくれん冬こもり

白眼<sup>ニシテ謝<sup>スレハ</sup></sup>客<sup>ヲ</sup>ころえぬ事ニ候

自のきたな心こそ可恥事ニ候

春

舞まひの場<sup>\*</sup>もふけたり梅かもと \*「場」の左に傍線

うくひすに終日遠し畑の人

しら梅やいつの比より垣の外<sup>ト</sup>

梅園にふとし引<sup>【編点<sup>マ</sup>マ</sup>】ずる主かな

鶯や家内揃て飯時分

右いつれも病後のことゆへ

日来よりも又あさましく

候へとも書付候御社中方

よろしく御致声可被下候

内ノものも御伝言申上候かしく

正月五日

暮雨主盟

紫狐庵

(深沢眞二)

## 6 歌謡

49 (池大雅自画讀俗謡短冊) (いけのたいがじがさんぞくよう たんざく) 【19・13】

統一書名は「大雅自画賛句幅」。池大雅の自画讚を額装した  
もの。一面。縦三〇、八×横六、四纏の短冊片。下方に茄子の  
絵を添える。茄子と糸瓜の絵を添えた同文の作品「茄子糸瓜図  
賛(なすへちまずさん)」（絹本一幅）が東京国立博物館に所蔵  
される。

(釈文)

閨に窓うつ時雨もよいわいな独寝／さめのさしきにゆかり  
思へは茄子／もよいわいな色も一しほ小紫 霞樵

(神作研二)

## II 歴史

### 1 史料

50 遠州異報(えんしゅういほう)【19・52】

国文研整理書名は「遠相彙報」。天保一三年から弘化三年にかけて、遠江国(御前崎)と相模国(小田原・浦賀)の沖合に目撃された異国船の記録書。半紙本一冊。「幕末」写。縦二三、五×横一六、二糎。鼠色表紙改装。外題は左肩題簽「遠相異報 完」。内題「壬五月/廿七日」/「遠州異報」。本文墨付四一丁。異国船の出没位置が描かれた彩色絵九枚を付す。一面一〇行前後。奥書なし。書写奥書「右金沢之内出来泥龜新田八郎兵衛方消息/文通之写/右/彼見蒲/村尾氏方/拝写」。

(川崎美穂)

### III 政治・法制 附故実

#### 1 官職

##### (1) 公家

51 百寮訓要抄(ひやくりょうくんようしやう)【19・46】

二条良基著。大本一冊。「江戸前期」刊(無刊記)。縹色雷文繫ぎ桐唐草模様表紙。縦二七、三×横一九、八糎。外題は表紙中央に「百寮訓要抄」と朱書。内題「百寮訓要抄」。本文墨付五五丁。一面一二行。楮紙。印記「古耕/齋/蔵書」。

(時田紗緒里)

52 百寮訓要鈔直説(ひやくりょうくんようしやうじきせつ)

【19・47】

岸康賢(やすよし)注。大本一冊。享保七年(一七二二)成。「江戸後期」写。茶色格子縞刷毛目表紙。縦二七、〇×横一九、二糎。外題は左肩に「百寮訓要鈔直説」と打付書き。内題「百寮訓要抄直説」。本文墨付八七丁。一面一二行。奥書なし。印記「留神/葉室」。

(時田紗緒里)

##### (2) 武家

53 職官志稿(しょつかんしこう)【19・45】

国文研整理書名は「室町幕府職員」。「栗田寛」編。半紙本一冊。「明治」写。刷毛目布目地表紙。縦二三、〇×横一五、六糎。楮紙。墨付七五丁。一面一〇行。圈点、朱点、朱引きあり。外題「室町幕府職員」(左肩四周双边貼題簽に墨書)。内題「職官志稿/室町幕府職員」。栗田寛編『職官考』(山一書房、一九四四)「室町時代之部 職制」の稿本か。冒頭に「引用書目」として一四四部の書目を掲げ、それを適宜引用しながら「管領」以下室町幕府職員の職掌につき解説する。写本に九州大学附属図書館萩野文庫蔵本がある。木藤才蔵『連歌史論考下増補改訂版』第七章にて、「架蔵」として利用が確認される(四二七頁)。

(川上 一)

書名索引

- 一、索引は、解題所載の書名を対象とし、その掲出位置を通し番号で示した。
- 一、標目として立項される書名を本項目とし、統一書名や整理書名、別名などは「見よ項目」とした。
- 一、排列は、書名の通例の読み方により、現代仮名遣いの五十音順に拠った。
- 一、異なる書が合写・合綴されている場合は、それぞれを立項した。
- 一、細目も適宜拾った。
- 一、索引は神作研一が作成した。

	池大雅自画讃俗謡短冊	い	49
	因幡千句		36
	え		
	永正七年七月五日肖柏性繁宗碩三吟何人百韻		↓賦何人連歌
	永正一二年一月一日聴雪宗長等山何百韻		↓山何
	永正八年一月三日宗長独吟百韻		↓山家之連歌
	永禄二年二月三日賦何衣連歌		↓賦何衣連歌
	遠州異報		50
	遠相彙報		↓遠州異報
	お		
	老のすさみ		10・11・12・13
	か		
	懐旧之連歌		43
	き		
	聞書		18
	暁台宛て蕪村書状		48
	享禄三年三月三日白何		43
	桐火桶		5
	金葉和歌集		7
	く		
	句入蕪村手紙		↓暁台宛て蕪村書状
	愚秘抄		4・5



水鏡	み	2
夢庵肖柏付句	む	43
室町幕府職員	め	
↓職官志稿		
明鏡秘集	も	
↓連歌奥儀明鏡秘集		
毛利千句注	や	
↓紹巴昌叱両吟千句注		
山家之連歌		43
山何	り	43
良寛和尚墨跡	れ	3
連歌奥儀明鏡秘集		19
連歌合集		43
連歌指南車		20
連歌書		
↓連歌天水抄		
連歌初学抄		15
連歌初心抄		16
連歌新式		25
連歌新式聞書追加并新式今案等		30

26  
26  
29

連歌新式注解書	↓連歌新式	
↓連歌新式聞書追加并新式今案等		
連歌新式追加并新式今案等		26
連歌撰善集		27
連歌付合集		28
連歌天水抄		17
連歌の歌新式		35
連歌秘袖書		20
連歌百韻		21
連歌本式目		22
連歌寄合抄		23
連俳秘決抄		18
		9
		18
		31
		24
		33
		34

『賦何衣連歌』翻印

川上 一

永祿二天神法樂』(外題)

宗養筆』(端裏書)

永祿二年二月三日

天神法樂(端作り)

賦何衣連歌

- 1 玉たれの花の香白し夕月夜
- 2 露ほのかすむ庭の松風
- 3 空にみえて春やつもらぬ雪ならん
- 4 山のはちかくはるゝ江の水
- 5 ゆくあとのなみに一つらかり啼て
- 6 きり間にうかふ船のはるけさ
- 7 かりつくす田面のむらのくれわたり
- 8 かけはすゝきのかれのこる色
- 9 時雨にも秋のなみたのおとらめや

宗養 良政 紹巴 清蒼 仍景 洞圭 能哲 重臨 』 1 紙 哲

- 10 こぬ夜の空は月もあやなし
- 11 ほとゝきすたかねさめをかさそふらん
- 12 風にかほるはやとのたちはな
- 13 すゝしさはをのつからなる夕にて
- 14 ゆくく山はかけふかきみち
- 15 すむかたとみえしたく火もくるゝ野に
- 16 ふゝきいてたる雪のむら竹
- 17 寒ぬれはとりやねくらをさはくらん
- 18 また春あさき水の末く
- 19 ぐち残る葉分つのかむ芦はらに
- 20 人もかけせぬ舟そかすめる
- 21 かひすてゝいそく馬屋の跡さひし
- 22 賀茂のまつりのくるゝ神かき
- 23 かけ置し数はあまたのしめ縄に
- 24 いのるおもひもあたし里く

宗養 良政 洞圭 能哲 重臨 』 2 紙 景 哲 巴 養 政 巴 哲 誉 養 政 巴 景 圭 養 誉

25 つれなくてとをるこゝろよいかにせん  
 26 わかまへわたりかこちてもいさ  
 27 あたらかの手馴ぬほとの中にして  
 28 よそにたち行名こそつられ  
 29 ゆへありといふもことなるはらからに  
 30 声をきくたにひなひたるのみ  
 31 柴の戸はとひよるもまたあけやらて  
 32 風のとつてなる山さとのあき  
 33 鹿の音はきりのまかひの遠近に  
 34 いろにましはるまきの葉の月  
 35 暮残る花に絶／＼かねなりて  
 36 今のは春はたれかおしまぬ  
 37 わかるてふみちのをしへのかの仏  
 38 おもひとる世は宇治山のおく  
 39 くらゐこそ身のほとによる物ならめ  
 40 こゝろののそみなとかはてなき  
 41 一夏とちきりしのちもあくかれて  
 42 ちかまさりする人のおもかけ  
 43 河きりもやゝ明かたの高瀬舟  
 44 ちとりなきたつ秋のさよ風  
 45 月にしも田つらのみちは物さひて  
 46 柳打ちる岡のへのくれ  
 47 草葉みな露の下にやしほるらん

景 養 圭 政 養 景 巴 誉 哲 巴 養 圭 巴 養 景 政 哲 養 巴 誉

『3紙

48 羽をよはけなるてふのあはれさ  
 49 かすみてもあしたのほとはさむき野に  
 50 日のさすかたやこほりなかるゝ  
 51 打わたす霜の板はし末絶て  
 52 ひとりさきたつ山は夜ふかし  
 53 うつら啼こゑは雲井かみねの松  
 54 みれはいらかの軒はかさなる  
 55 あらためてうつすをこそはみやこなれ  
 56 つみにあたれる人のかなしさ  
 57 身にははたしらぬむくひもありつへし  
 58 空になしつるかことはかなみ  
 59 年へぬるかきりもまたぬ新枕  
 60 かゝる命と月もことはれ  
 61 うき袖もたれゆへならぬ露のくれ  
 62 ふりぬるあとをわか忍ふ草  
 63 うへ置し心や花にみえさらん  
 64 やとりわすれすきゐるうくひす  
 65 かきね行水のかはつも時めきて  
 66 あさみとりなるかけの苗代  
 67 呉竹のなひきてあくる野を遠み  
 68 いかに夜の間の雪はふりけん  
 69 月にね程もあふきを枕にて  
 70 あやしや人のゆくゑこたへぬ

養 巴 誉 哲 圭 養 誉 政 巴 哲 景 養 巴 誉 景 圭 巴 政 誉 巴 哲

『5紙

『4紙

71 まかせぬる戸口のしるへくるしきに  
 72 河をみなどの風のはや舟  
 73 さしのほるしほよりなみの音そひて  
 74 みえてほのかにけふる一むら  
 75 うち残すしつか山はた雨ならし  
 76 花のあたりのわか草の露  
 77 明ほのゝ声はまくらの百ちどり  
 78 けふより年やあらたまり行  
 79 あり明の入さもわかぬ野を遠み  
 80 おき出てみれば霜のあかつき  
 81 手枕の夢おとろかすかねのこゑ  
 82 人まちよはる比のかたしき  
 83 なみた猶忍ふるそてに絶やらて  
 84 たのみもてこしあさちふのくねかせ  
 85 山風のあらちのふもとやとりかせ  
 86 のるこまなつみ雨きほふみち  
 87 あつかりしかけかたふきてくもる日に  
 88 おくはひはらの木間なきまで  
 89 たきつせもちればさくらにうつもれて  
 90 かすみのうちにくるゝ河音  
 91 のとかなる船やさす共みえさらん  
 92 そてもひとしきとを山の色  
 93 重ぬるたもとの色も夏衣

景 巴 景 政 養 哲 景 誉 政 養 誉 巴 景  
 『 6 紙  
 『 7 紙

94 ほたる計の今朝のうつみ火  
 95 をとしけん流の困ははるかにて  
 96 みきりの滝は岑に残れる  
 97 かくあともなみたなからのことの葉に  
 98 たえはたえねもうらみわひつゝ  
 99 かたいともあはをにとこそたのみつれ  
 100 しらへそへしも□□ぬこと音  
 臨 誉 景 圭 哲 政 養

宗養廿 能哲十二  
 良政十一 重臨二  
 紹巴十九  
 清誉十五  
 仍景十三  
 洞圭八  
 『 8 紙

『天正九年五月六日賦花何連歌』 翻印

川崎 美穂

連歌 百韻 (外題)  
天正九年五月六日 (端作り)

賦花何連歌

- |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1  | な | か | き | 根 | は | ひ | き | も | つ | く | さ | ぬ | あ | や | め | 哉 | 紹 | 巴 |
| 2  | 池 | 水 | ふ | か | し | 五 | 月 | 雨 | の | 空 |   |   |   |   |   |   | 守 | 隆 |
| 3  | か | は | つ | な | く | 田 | つ | ら | の | さ | か | ひ | 暮 | 初 | て |   | 白 |   |
| 4  | か | す | み | こ | め | た | る | を | ち | こ | ち | の | さ | と |   |   | 昌 | 叱 |
| 5  | 春 | の | 夜 | の | 月 | に | と | も | な | ふ | 道 | の | 末 |   |   |   | 日 | 野 |
| 6  | 都 | の | 夢 | を | か | た | し | き | の | 袖 |   |   |   |   |   |   | 文 | 閑 |
| 7  | 明 | か | た | の | 野 | は | な | を | 露 | や | し | け | る | ら | し |   | 正 | 繁 |
| 8  | ふ | き | す | て | に | た | る | あ | き | の | 山 | か | せ |   |   |   | 式 | 政 |
| 9  | 色 | な | か | ら | 木 | の | 葉 | か | つ | く | か | さ | な | り | て |   | 既 | 在 |
| 10 | 岩 | ま | の | 水 | の | た | え | く | の | 音 |   |   |   |   |   | 紹 | 与 |   |
| 11 | 河 | 波 | や | 暮 | 行 | ま | く | に | 氷 | る | ら | ん |   |   |   | 員 | 滋 |   |
| 12 | わ | た | し | く | て | 帰 | る | 舟 | 長 |   |   |   |   |   |   | 紹 | 巴 |   |
| 13 | 旅 | 人 | は | 雨 | よ | り | さ | き | と | い | そ | く | 日 |   |   | 昌 | 叱 |   |
| 14 | 見 | る | く | 雲 | の | か | く | る | 山 | く |   |   |   |   |   | 白 |   |   |
| 15 | 巻 | あ | く | る | す | た | れ | そ | よ | め | く | 風 | 落 | て |   | 守 | 隆 |   |
| 16 | 契 | を | き | つ | く | ま | つ | 袖 | も | う | し |   |   |   |   | 日 | 野 |   |
| 17 | た | の | め | て | も | あ | た | し | 心 | は | い | か | な | ら | ん | 文 | 閑 |   |
| 18 | い | は | け | な | き | こ | そ | い | ひ | な | し | に | よ | れ |   | 正 | 繁 |   |
| 19 | 中 | た | ち | を | た | く | を | ろ | か | に | お | も | は | め | や | 式 | 政 |   |
| 20 | し | た | ふ | 名 | 残 | も | 明 | や | す | き | 月 |   |   |   |   | 既 | 在 |   |
| 21 | ま | く | ら | か | る | お | の | へ | の | 花 | に | 雁 | 啼 | て |   | 紹 | 与 |   |
| 22 | と | ま | や | し | つ | か | に | か | す | む | 磯 | 山 |   |   |   | 守 | 隆 |   |
| 23 | 春 | 風 | も | あ | さ | け | も | よ | ほ | す | 波 | の | 音 |   |   | 紹 | 巴 |   |
| 24 | よ | り | 藻 | た | く | 火 | の | 影 | し | め | る | 也 |   |   | 昌 | 叱 |   |   |
| 25 | 旅 | こ | ろ | も | 秋 | に | や | う | す | く | お | ほ | ゆ | ら | ん | 白 |   |   |
| 26 | 分 | 出 | る | 野 | の | 末 | の | 朝 | 霧 |   |   |   |   |   |   | 文 | 閑 |   |
|    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

27 さをしかの立帰行跡とめて  
 28 さやけき月におれる萩か枝  
 29 野分たゝまかきのうちやたえぬらん  
 30 ひらきをきぬる戸ほそかたふく  
 31 まつほと枕はかなく明はなれ  
 32 うつゝこそあらめ夢たにも憂  
 33 目の前に猶のちの世の身を知て  
 34 子のためとてや宮つかへ人  
 35 たのむてふ神のめくみのふかゝらし  
 36 あかしの舟やすみよしのはま  
 37 淡路鳴うかへる月に霧晴て  
 38 時雨はいつちめくる秋風  
 39 うつろふにたゝかたはらの枯檜原  
 40 春のかたみの花のころ山  
 41 古寺のあとほかすみにかこはせて  
 42 夕のおくの鐘ののとけき  
 43 つり人や浪をまくらにねふるらん  
 44 うちみたれたる芦の一むら  
 45 あつまるもともに啼たる浦の鶴  
 46 ふかき霜夜の日影さす方  
 47 かすかにも見えてこぼるゝ今朝の露  
 48 色や馬草に荇残すらん  
 49 あすもとて狩場のを野の秋の袖

正繁  
 式政  
 日野新中納言  
 紹与  
 守隆  
 昌叱  
 紹巴  
 昌叱  
 日野新中納言』3紙  
 紹与  
 正繁  
 紹巴  
 昌叱  
 白  
 昌叱  
 式政  
 白  
 昌叱

50 あたゝめ酒になをあかぬ友  
 51 こなたかなたわかるゝ道やわするらん  
 52 心のやみの夢の面影  
 53 かはず間もたゝ玉ゆらの手枕に  
 54 千夜を一夜もあやなむつこと  
 55 さたまらぬ命のほとをおもふのみ  
 56 ゆるすかきりもあはれさすらへ  
 57 贈るこそ猶いやたかき位なれ  
 58 なへてしあらぬからきぬの色  
 59 秋草の中に野守のましはりて  
 60 むしの鳴音のしるへとはまし  
 61 月こそはむかしのやとのあるしなれ  
 62 跡もあらしの軒の板葺  
 63 木つたひのしつくをとする雪晴て  
 64 帰りもやらぬ柴人の袖  
 65 河舟やすゝしきなみにまかすらん  
 66 竹の葉おほふ岸のかた洲  
 67 流せく苗代を田にしめはへて  
 68 ちまたに春の雨やすきけん  
 69 うちかすむ村よりむらの明わたり  
 70 はつ音そへつゝうくひすのなく  
 71 めつらしきやよひの空の時鳥  
 72 むかふあしたの山のはの月

文閑  
 守隆  
 日野新中納言  
 紹巴  
 昌叱  
 正繁  
 紹与  
 白  
 文閑  
 昌叱  
 式政  
 守隆  
 文閑  
 守隆  
 白  
 文閑  
 昌叱  
 式政  
 守隆

73 すさまじきかせにや舟をつなくらん 白  
 74 波なれころもさそな露けき 既在  
 75 わひしきはなたの塩屋のかけにして 日野新中納言  
 76 塵にそうつむ松か根の道 昌叱  
 77 茂る木のいつくに花のさきぬらん 紹巴  
 78 み山かくれの鳥の声／＼ 文閑  
 79 すつる身をたつねくる人あらんやは 正繁 『6紙  
 80 柴のいほりそしはしたのしむ 白  
 81 冬の夜はつもりし雪に宿かりて 守隆  
 82 しるしらすしもかたる古事 日野新中納言  
 83 いさめこそおさまる時をためしなれ 昌叱  
 84 あひにあひたる君かうしろみ 紹与  
 85 えにしたゝとりなしからにさたまりて文閑  
 86 ちきりそめんの日をえらふ中 紹巴  
 87 夕暮のこゝろいられもやるかたな 式政  
 88 忍ふむかへの車なりけり 昌叱  
 89 とのゐもり声もやゝいさ更／＼て 既在  
 90 かゝけぬかけはほそき灯 白  
 91 かさなれる雲間の月やもれぬらん 正繁  
 92 秋にすゝしき水の水上 日野新中納言 『7紙  
 93 ほたるとふ夕またるゝ天つ雁 紹巴  
 94 門田のはらのほのかなる色 紹与  
 95 かた岡の柳にまじる花散て 白

96 かすむ小雨ははるゝともなし 守隆  
 97 さひしさはたゝ露の間も永日に 日野新中納言  
 98 いく度はかりならず玉琴 式政  
 99 暁にうつりもて行き夜神楽 昌叱  
 100 いかきのあたりものしつか也 文閑

紹巴 十三 正繁 八  
 守隆 十 既在 七  
 白 十二句 紹与 八  
 昌叱 十三  
 日野新中納言 十 員滋 一  
 文閑 十  
 式政 八

『8紙

